

技術と人間

昭和49年8月13日第三種郵便物認可
昭和63年3月10日発行(毎月1回10日発行)
第17巻第3号第175号

1988
M
A
R

3

に 現
挑 代
む が
総 問
合 う
雑 も
誌 の

特集

商品化時代の生命

遺伝子治療と
優生政策

福本英子

最近の
「脳死・移植問題」
事情

西邑 亨

母子保健とエイズ

畦地豊彦

米国の「エイズ行政」
パニック

佐藤雅彦

なぜバイオエシックス
なのか

編集部

放射能汚染の中での
反原発

小出裕章

Gijutsu to Ningen
Publishing Co.

放射能汚染の中での反原発

小出裕章

はじめに

一九八六年四月に突然発生したソ連チェルノブイリ原子力発電所の事故は、原子力発電の持つ恐ろしさを改めて私達に教えてくれたし、全世界の食糧をくまなく汚染した。そしてその現実の中で、反原発運動もさまざまな形の運動を模索してきた。私は、一九八七年十月号の本誌に、「放射能汚染の現実を超えて」という論文⁽¹⁾を掲載してもらったが、それには二つの動機があった。一つは、原子力を推進している世界各国が汚染の真実を公衆の目から隠そうとしている中で、少なくとも私が知り得た真実を広く公衆に知らせ、とにかく子供

達を被曝から守りたかったことである。二つめの動機は、食糧汚染を巡る反原発諸団体の動き、とくに都市部のそれに強い危惧を抱き続けてきたので、反原発運動の原則をもう一度考え直すために、強い批判を浴びることを覚悟で、あえて議論の材料を提供しようと考えたことである。

国の規制値にはまったく根拠がない

一つめの動機については、おそらく多くの反原発運動に特別の批判もなく受け入れられたものと思うが、未だにゆゆしき動きも存在している、

昨年十月八日に弘前大学医学部の学生によって、日本生協

連が取り扱っているイタリアンスパゲッティから 71Bq/g のセシウムが検出されたことが報じられた。⁽²⁾ この値自身は、イタリア産のデュラム小麦を使う限り、当然生じることが予想される値である。しかし、この検出を受けて、生協連傘下の各生協には、微妙な対応の違いが現われた。即ち、火元の弘前市民生協と青森市民生協では、問題のスパゲッティの販売を休止することにしたが、一方生協連では、問題の汚染値が国の基準(370Bq/kg)より低いから問題はないと主張するとともに、当初一袋一七〇円のスパゲッティをウルトラプライス一三五円で特売することで、だぶついたスパゲッティを処分し始めたのである。⁽³⁾ この問題の追求を受けたある生協担当者は『この製品を拒否すると、イタリアの生協を困らせることになる』といったそうだが、その発言はこの問題の本質を鋭く示している。汚染した食糧をどう取り扱うかはとても難しい問題であり、各々の団体・個人で、各々の判断があるだろうし、スパゲッティの供給をつづけること自身については、私は賛成である。しかし、汚染の事実を知らせ、子供には食べさせない方がよいことを知らせながら、スパゲッティを供給し続けることと、問題がないとして安売りしてしまふこととの間には天と地ほどの差がある。国の基準より低いから安全であるなどというのは、言語道断であるし、それが生協というような団体をとるべき態度とは到底思えない。

放射線が発見されてからすでに約一〇〇年たつが、図1に示すように、この間科学的な知見が増えれば増えるほど、ますます放射線の危険度が大きいことが明らかにってきた。現在の日本の許容量は、国際放射線防護委員会(ICRP)が一九六二年に出した勧告にもとづいて定められたものであり、労働者の許容量は 50mSv/年 、公衆のそれは 5mSv/年 とされている。しかし、その後も、放射線の危険度はますます大きなものであることが明らかにになり、ICRPは一九八五年になって公衆の許容量を 1mSv/年 にするよう勧告せざるをえなくなった。また、つい最近、原爆被爆者の被曝量の見直しにより、放射線の危険度はICRPのものに比べて、少なくとも六倍から十二倍大きいことが明らかにされている。⁽⁴⁾ ICRPは、最近のデータを見直すために約二年ほどの時間が必要であるとの理由で、規制値をただちに変更することには難色を示しているが、委員長自身が一九九〇年を目標に、許容量をさらに厳しくすると言明するに至っている。こうした中で、英国放射線防護庁は、昨年十一月、労働者の許容量を 15mSv/年 に、公衆の許容量を 5mSv/年 にするよう声明を発表している。⁽⁵⁾ 日本の現在の輸入食品に対する規制値(370Bq/kg)は、それが一年間続くと 170mSv の被曝になるとの仮定から算定されたものであり、英国の新しい規制値を満たさないばかりか、ICRPの一九八五年の勧告す

[レム/年]

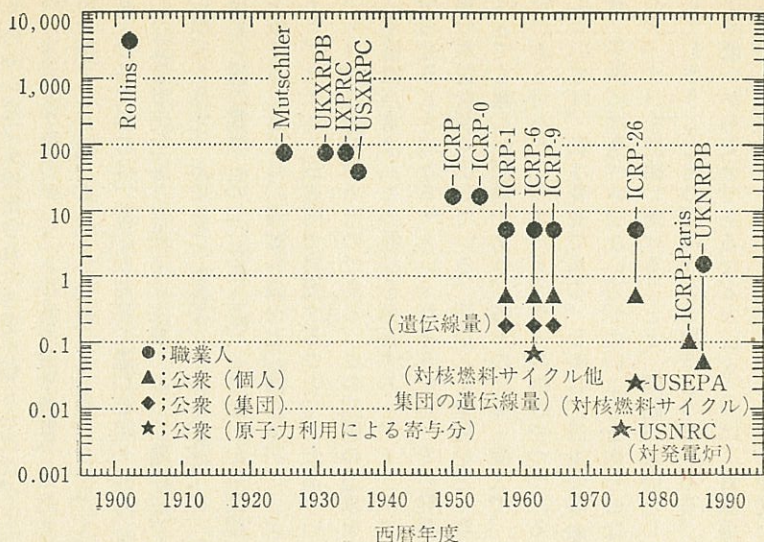


図1 放射線被曝許容量の歴史の変遷

この図は縦軸が対数で目盛りされていることに注意。ひとつの目盛りで10倍づつ変化しており、一見変化がゆるやかに見えるが、職業人の許容量などは1000分の1以下になっている。

らも満たしていない。

安全な被曝量など存在しない

もともと、科学の世界において一つの主張を行なうに当たっては、その根拠を明示することが最低限の条件であるといえるが、ICRPの勧告では最も重要な放射線の危険度の見積りについて、何等の根拠も示されていない。根拠を示さない理由は、委員の間に「勧告を出す機関としての権威がなくなる」という反対があるためだが、⁽⁶⁾そんな勧告が国際的な権威として通用することの方がよほどどうかしている。もともとICRPは単なる任意団体に過ぎないのに、原子力を推進する世界各国はそれをあたかも国際的な権威であるかのように宣伝し、原子力の推進に都合の良いようにICRPを利用してきたというのが真相である。しかし、米国のゴフマン博士は、ICRPが示している放射線危険度の値は約四〇倍も過小評価であることをすでに示している。⁽⁷⁾従って、いま現在そして今後とも、大幅な許容量引き下げこそが必要なのである。しかし、もっと本質的なことは、許容量とは、それ以下なら安全だという安全量ではなく、危険はもちろんあるがそれを我慢できるか否かという量、つまりガマン量あるいはガマンさせられ量だということである。

放射線の被曝には安全量などないのだということ、そして

子供達は放射線に敏感であるということを私達は再度確認しておく必要がある。

原発の恩恵を受けている国は汚染も受け入れよ

私の第二の動機については、すでに本誌一月号に青山明弘氏が論考^⑧を寄せておられるし、私自身も多くの方々からご意見をいただいた。その中には賛同のご意見もあったものの、予想していたとおりにさまざまなご批判もいただいた。わずかであってもこの件で議論を起こすことができたのであれば、それで私の動機は達せられたことになるが、寄せられた批判は一つひとつどれも真摯なものであり、それらにもう一度応えることによって、反原発運動の発展に少しでも寄与したい。

第二の動機に関する私の主張については、いささか長くなるが前回の論文に一部加筆修正の上引用する。

「現在日本の国が輸入食品の規制という手段を借りて行なっていることは、原子力開発がもたらした汚染の真実を隠すという作業である。それに対して反原発諸団体は、国に対して、より厳しい規制値をとって、日本に汚染食品が入らないようにすることを求めている。

しかし、私にはそうした反原発諸団体の運動が理解できない。何故なら、日本が輸入拒否して、汚染食糧が日本国内に

入ってこないということと、汚染食糧がこの世からなくなるということとは、当然のことながら等しくないからである。国に対して、検査の強化を求めること、そしてその結果を公表するよう求めることについては、もちろん私も賛成である。

しかし、日本の国に対して、汚染が国内に入らないよう規制強化を求めることについては、私はどうしても同意できない。日本が拒否した食糧は、他の誰かが食べさせられるだけだからである。即ち、これまで原子力を利用してこなかった国々、それ故に汚染を検査することすらできない国々、貧しく食糧に事欠いている国々が汚染食糧を負わされるのである。

原子力開発によるデメリットは、誰を措いても原子力を推進している国々こそが連帯して負うべきであって、間違っても原子力を選択していない国々に負わせるべきではない。従って、チェルノブイリ原発事故による汚染は、それが選択可能なものである限り、当のソ連は当然にしても、フランス、日本のような原子力開発に積極的な国々こそが引き受けるべきである。

放射能で汚れた食べ物を私は食べたくない。日本の子供達にも食べさせたくない。しかし、日本という国が少なくとも現在原子力を選択している限り、日本人は自らの目の前に汚染した食糧を上らせて、原子力を選択することの意味を十分に考えてみる責任がある。」

弱者にしわ寄せされる放射能汚染食糧

私の主張に対して、「日本が拒否することと、飢餓に苦しむ国々に押しつけられることは等しくない」、「もし汚染食品が、捨てる代わりに飢餓国へ『ほどこし』としてもって行かれていたとしたら、是非そういう事実を明らかにしてほしいものです。そうしたら反原発の人達は、必ずその反対の運動に取り組むことでしょう」という批判があった。私には、この批判に応えて、数多くの例を示して汚染食糧の行方を立証することはできない。しかし、西ドイツでは、ある商社が通常の一八分の一の値段で買った汚染乳清粉末（粉ミルク）をエジプト・アンゴラに輸出しようとし、それを知った西ドイツ内の運動体が必死の努力でそれを阻止したことがすでに報道されている。⁽⁹⁾（仮に、これが日本であったら、こうした運動が成立し得たかどうか私は心配している。）しかし、この汚染乳清粉末も、発見されたのは約七〇〇〇トンであるにもかかわらず、実際に生産されたものはバイエルン州だけでも少なくとも一万三〇〇〇トンにも及ぶのである。残りの六〇〇〇トンがどうなってしまったのかについては、いまだに闇に包まれたままであり、それがすでに第三世界の子供達に食べさせられていないとすれば、まさに幸いというべきだと私は思う。そして、この問題にしても氷山の一角にすぎない

のである。

誰が何を立証すべきなのか

この問題は実は反原発運動がかねてから悩まされてきた問題によく似ていると私は思う。つまり、誰が何を立証すべきかという問題である。原発内で働く労働者は、これまでに莫大な被曝を強制され、当然のことながら多数の被害を生じていると思われる。しかし、被害を受けた労働者は何等の情報も与えられていないにもかかわらず、その労働者の側が被害の原因を特定して立証しなければ、何等の補償も得られないという厳しい現実がある。⁽¹¹⁾しかし、因果関係の立証責任はすべての情報を握っている原発側にこそあるのであるし、今回の問題でも世界の各国が、汚染食糧を第三世界に負わせていないということこそを立証すべきなのである。その立証がなされていない以上、そして汚染食糧が廃棄されたという立証がない限り、それは誰かしらが食べさせられているのである、その誰かしらが第三世界の人々であることは私にはまったく疑い得ないし、もし反原発に携わる人でそう思えないとすれば、想像力の貧困に決定的な問題があると思う。

運動はどういう波及効果を持つか

また、「日本の規制を厳しくすることで他国にもそれをフ
 オロウさせることができるから、まず日本の輸入規制を厳し
 くさせなければならない」という批判もあった。たしかに、
 日本の規制が厳しくなれば、それなりに原子力を推進してき
 た工業文明国の基準に影響を及ぼすことができるかも知れな
 い。しかし、私が問題にしたいのは、日本が輸入規制を厳し
 くしようがどうしようが、そんなこととはまったく無関係な
 次元におかれている国々の人々である。食糧汚染問題を議論
 した国連科学委員会において、工業文明諸国からの代表が規
 制値問題を議論していたとき、アフリカ諸国からの代表は自
 分達の国では汚染の検査すらもできないと訴えたという。工
 業文明国の基準が厳しくなればなるほど、逆に汚染をしわ寄
 せされる国が生じるといふ厳しい現実が存在している。

国が恐れていること、運動に必要なこと

私に批判を寄せてくれた方々は、たぐいまれな優れた運動
 家達である。そのうちの一人の方は次のように書いてきた。
 「反原発運動は推進者との戦いです。戦いは相手の弱点を
 衝く、相手をできるだけ困らせるというのが戦術です。規制
 を厳しくしろ、しかしハネラレた食品は飢餓国に持って行っ
 たらよろしいでは、相手を困らせたことにならない。あるい
 は飢餓国へ持って行ったら困るから、私達が目をつぶって食

べましようでも、相手を困らせたことにはなりません。です
 から規制を厳しくしろという要求運動と、こちらが拒否した
 ものを彼らにも食わすなという要求運動と、両方必要だとい
 うことになるかと思います。」

この批判に対して、私は二つの点で意見を述べたい。まず、
 原子力を推進している国が今最も恐れていることは何かとい
 う点である。すでに書いたように、現在、日本の国が輸入規
 制という手段を借りて行なっていることの本質は、日本人に
 汚染の真実を知らせないという作業なのである。国が本当に
 いやがっていることは、公衆が汚染の真実を知ってしまうこ
 とであり、彼らの本当の防衛線は汚染データを公表しないとい
 う点にこそあるのである。仮に、規制値が厳しくなり、規
 制に引っかかる食糧が増えたとしても、それでは、ますます
 日本の食卓は安全だという幻想を公衆に与えてしまうことに
 なる。大切なことは、放射能汚染の真実を公衆に知らせ、一
 人ひとりが主体的に汚染と向き合う作業だと私は思う。

私は前回の論文で「誤解を恐れずに敢えて言うならば、日
 本の子供であるか否かにかかわらず、子供たちに真実を知ら
 せないまま放射能汚染食糧を与えるよりは、私は真実を噛み
 しめながらそれを食べたいと思う」と書いた。また、チェル
 ノブイリ原発事故以来、多くの集会に参加してきて、日本人
 の大人は汚染食糧を食べて下さい、といってきた。しかし、
 私は、ただ食べて欲しいのではない。大人には真実を噛みし

めながら食べて欲しいのである。目をつぶって食べて欲しいのではなく、危険をはっきりと視ながら、目を見開いて食べて欲しいのである。そのためにこそ、汚染のデータを公表させることがまず何よりも必要なのである。

私に批判を寄せて下さった方の中には、私の主張は理解できるが、やはり放射能は食べたくないという方がたくさんいた。私にしても、過去の歴史も未来もなく、ただ放射能を食べたいか食べたくないかと問われれば、もちろん食べたくない。しかし、この件では私は、かねてから思ってきたことがある。それは、ともすると私達の行為が時間の流れから切り離されて論じられ易いことである。私達は、空間的には三次元空間に住んでいるが、私達の世界は実際にはそれに時間という次元が加わっており、私達は過去の歴史を背負いながら、未来に向かっていま現在を生きているのである。食べるという現在の行為を時間の流れの中から切り離して、議論することは大きな誤りを犯すことになる。真実を噛みしめながら食べるということは、現在すでに三六基もの原発を許してしまっている日本人の大人として、明日をどう生きるかということにつながるのである。

多元的な運動と根源的な運動

規制強化の要求運動と、飢餓国への輸出拒否の要求運動と

両方が必要だとの指摘が誤りだとは私は思わないし、もし、実際の反原発運動の動きがそうならいいのだとすれば、おそらく私は前回の論文を書かなかっただろう。しかし、反原発運動のなかには、飢餓国への輸出拒否の要求運動など存在していないのである。それは、汚染食糧の飢餓国への輸出が明確に立証されないこと、それを感じることができないという想像力の決定的な欠如にも問題があるが、後に述べるようにおそらくこれまでの反原発運動が、「いわれない被害を拒否する」という被害者意識にのみ立った運動であるからだとは私は危惧してきたのである。反原発運動の原則は弱いものを踏台にしないということにあったと私は思うし、そうであるならば、まず汚染食糧の飢餓国への流入を阻止するという運動こそが根源的な運動になければならない。運動は多元的であるべきだ。しかし、根源的な運動を欠如したままの運動は時に真に求めている目標と相容れないこともあるのである。

運動の形成と目標

「むしろこの際放射能の恐ろしさを徹底的に暴き、これまで原発に対して無関心であった大部分の一般大衆の被害者意識を利用して反原発運動を進めるべきだ」という批判もいた。

つい先日厚生省の役人が、国の規制値以下の汚染なら安全

であり、汚染値の公表などまったく必要ないと述べていた。⁽¹²⁾

しかし、先にも述べたように、放射線の被曝に関しては安全量など存在しないし、厚生省の輸入規制値は、日本人に輸入食品から一年間で約一七〇ミリの被曝を許すことになる。従って、一億二〇〇〇万人の日本人が全員これだけの被曝をするとなれば、約七万人ものガン死が生じることになるのである。⁽¹³⁾

国が放射能汚染の真実を隠し、放射能にも安全量があるかのような主張をしている現在、放射能の恐ろしさは、どんなに訴えても訴え足りないと思うし、そうすべきだという主張に私は賛成である。そして、そうであるからこそ、私は輸入規制の撤廃を求める一方で、汚染測定データの公表を求めたのである。すでに前回の論文でも述べたように、子供には原子力を選択したことの責任がないが、放射能に対する子供の感受性は大人に比べてはるかに高い。そして、仮に規制値を低くできたとしても、汚染のデータが公表されなければ、私は子供達を放射能汚染から守ることができないのである。問題は、規制値の高い低いにあるのではなく、事実が知らされないことにこそあるのである。

食べ物の問題は重要である。しかし、自分だけが、自分の家族だけが、自分の回りの人たちだけがという視野でその問題を捉えようとするならば、それは反原発運動の原則に反すると私は思う。食べ物の問題が自分にとって大切だというこ

とは、他の人にとっても大切なのである。運動が『自分はイヤだ』という強烈的な衝動から起こることを、私は否定しない。そして、それを大切にしなければならぬという点も否定しない。しかし、その視野が自らの身を守るという点だけにとどまって、被害者意識のみに依拠した運動にとどまるならば、その運動はまことに醜悪なものになるだろうと私は思うのである。

根源的な運動の具体像

前回の私の論文では、「具体的提案がはっきりしない」という批判を多くの方々からいただいた。そして、私に批判を寄せて下さった人達は、それぞれの方が、それぞれ悩んで以下のような具体的な方針を提起してきた。

「汚染食糧は原発推進国の推進派の人たちで分け合うべきです。賛成する度合いが強い人はたくさん……」

「世界の原発保有国が、原発台数に応じて、汚染食品（一定基準以上……これが問題ですが）を自国に買い取る。あとは食べようと自国内で勝手に処分してよい。」

「輸入食品は無条件に輸入し、国内規制値（これも問題ですが）にひっかかるものは、日本内で、食品にしないで処分。」

「ヨーロッパなどからの輸入品で、もし放射能が検出され

ないものがあれば、そのものこそヨーロッパに返して、そちらの人達に食べてもらうべきだ。」

これらの提案をしてきた人達は一様に、これらの提案が現実的ではないと認めている。しかし、こうした提起がもし運動として取り組まれるならば、現在の輸入規制値の強化を求める運動よりもはるかに意味のあるものだと思はう。

次に、私の具体的な提案をここでもう一度述べておきたい。私の具体的な提案は、「日本の国として汚染食糧の輸入規制はしない。その代わり、子供達を守るために、現状の皆さんの検査体制を抜本的に強化し、その結果をすべて公表する」というものである。先に述べた方々からの提案に比べて私の提案はいかにもありきたりのものである。しかし、この提案で国と闘うのであれば、現在の規制値強化の提案で闘うよりも、はるかに国を困らせることになるし、反原発運動の原則とも決して抵触しないと私は思う。しかし、この提案が成立した場合には、日本国内では金持ちだけが汚染の低いものを買い取ることができ、貧乏人は汚染を承知でもそれを子供達に与えなければならぬという事態が起きるだろう。そして、ごく図式的にいうことが許されるなら、金持ちとは原発で恩恵を受けてきた人々であり、貧乏人とは原発で危険を負わされてきた人々なのであるから、私達は新たな矛盾に突き当たることになる。しかし、この社会の現実はまだに矛盾だらけなのであって、その矛盾に初めから蓋をしてしまうよ

うな運動よりは、矛盾を次々に掘り起こして行く運動の方がはるかに価値があると、私は思うのである。何故なら、仮に矛盾が視えないとしても、それは矛盾がないこととは異なるし、新しい矛盾が視えるようになるということは、運動自身の成長であり、次の矛盾を克服する力をも同時に獲得しつつあるだろうからである。

この現実を差別と呼ばずに何と呼ぶのか

私が「放射能汚染した食糧は、原子力で恩恵を受けてきた国々の人が食べよ」と主張したのに対して、「汚染したものをだれが食べるべきか? ということについて、誰も食べるべきではない。非汚染物が少なくなってくれば皆で少しずつ分けて食べよう、とりあえず」と書いてきてくれた人がいた。その意見に私は賛成である。そうなって欲しいと心から願わずにはいられない。また、「毒物はできうる限り避けなければならぬといえなければ、原発をとめようと人々に呼びかけることなどできない」という批判もいただいた。しかし、現在日本のような飽食の国がある一方、アフリカ諸国のように深刻な飢餓で苦しんでいる国々がある。私達あるいは私達の子供達が、たまたま日本に生まれたことで私達の大多数は食べ物に困るほどの生活を強いられない。しかし、アフリカ諸国に生まれた人々、子供達は、ただそれだけの理

一人当たり穀物消費量 [kg]

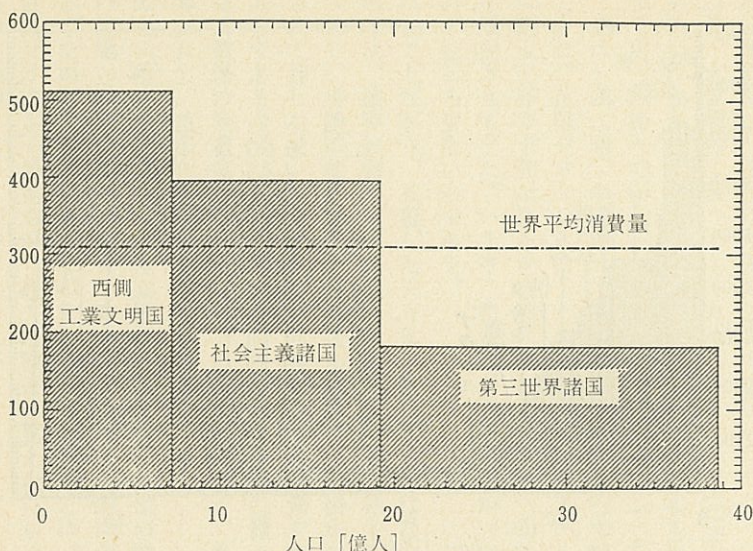


図2 一人当たり穀物消費量の不公平 (1974年)

由で日常的な飢餓に直面しなければならないのがいま現在の現実である。図2に世界の穀物消費実績⁽¹⁾を示す。この図から、一人当たりの穀物消費量(帯の高さ)で比べた場合、西側工業文明国の人々は、世界全体の半分を占める第三世界の人々に比べて、なんと約三倍もの穀物を消費していることがわかるし、全消費量(帯の面積)で比べても、西側工業文明国ではたった五分の一にも満たない人口(帯の横幅)で世界の穀物の約三分の一も消費していることが分かる。この図のデータは一九七三年から一九七五年にかけてのものであり、この格差は現在ではもっと著しくなっているはずである。日本が拒否した汚染食糧が飢餓で苦しむ国の子供達の口にも入らないのだとすれば、勿論私は汚染食糧を食べたくない。

こうした比較をエネルギー消費について行なうと、もっと著しい格差が浮かび上がる。図2を作成したのと同じようにして世界のエネルギー消費実績を图示すると図3となる。一人当たりの消費量でいえば、最もエネルギーを消費している国と、最もエネルギーを利用できない国とでは、なんと一〇〇倍もの格差があるのである。私達日本人も世界平均の二倍以上のエネルギーを消費しているし、東南アジア諸国の人々に比べれば一〇人から一〇〇人分ものエネルギーを使っているのである。世界全体では、わずか四分の一の人口がエネルギーの八〇%をも使っている。この格差を差別といわずに何と呼べばよいのか私には分からない。四人の人間がいると

一人当たりエネルギー消費量 [石油kg]

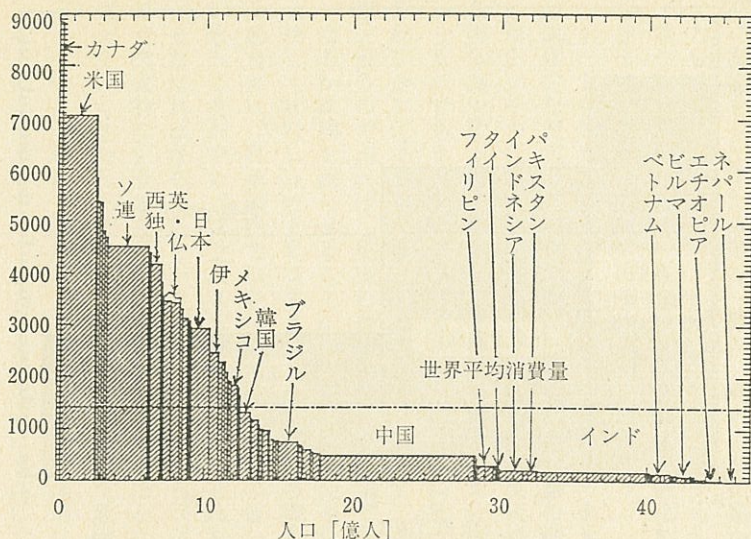


図3 1人当たりエネルギー消費量の不公平 (1983年)

すれば、その内の一人が八〇%ものエネルギーを使ってしまう、あとの三人で残りの二〇%を使っているのであるが、一番少ない一人はわずか一%以下のエネルギー消費しか許されていないのである。私達はまさに無茶苦茶な差別社会に生きているのであり、日本あるいは日本人は差別する側にいるのである。それにもかかわらず、生活を向上させるためにもっとエネルギーを要するから、原発は必要だというのが大多数の日本人の意識である。その上、原発がダメだというなら、別のエネルギー源を示すべきだなどという論理が、良識として通用しているような国がこの日本という国である。

一言いっておくならば、平和な日本で法に触れることなく生きているからといって、ただそのことで一人ひとりの日本人が『無罪』であるとはいえないし、日本国内で反原発を闘っているとしても、私自身を含めて、それで『無罪』であるとは、私には思えない。

「唯一の被爆国」と呼ぶ誤り⁽¹⁶⁾

日本はよく「唯一の被爆国」と呼ばれている。この言い方は実に漠然とした表現であるが、国土という意味でも国民という意味でも誤りである。日本ではたしかに広島・長崎で原発が爆発した。従って、まぎれもなく日本は被爆国である。しかし、原爆・水爆が爆発したのは日本だけであったのか。

私は前回の論文の書き出しを、人類が初めて遭遇した原爆の記述から始めたが、それは米国の砂漠で炸裂したのだった。

それ以降、大気圏内に限っても一九八〇年までに四二三回もの核実験が行なわれてきた。米国は自国内の砂漠や北太平洋の平和であった島々で一九三回の原水爆を爆発させてきたし、ソ連は一四二回、中国は二二回の原水爆を自国内で炸裂させてきた。英国やフランスは、オーストラリアやアフリカそれに南太平洋の平和な島々を犠牲に、合わせて六六回の原水爆を爆発させてきた。いまや、原水爆が炸裂しなかった大陸の方がむしろ少ないのである。

当然のことながら、被爆した人々も日本人だけではない。米国内では、核実験場周辺の住民に大量の被爆者が発生してしまったし、実験に参加させられた兵士達も、いま現在ガンに侵されて苦しんでいるのである。同様の事情はソ連や中国でも同じであるはずだし、犠牲にされた南北太平洋の島々の住民達は被爆の後遺症に苦しまされているだけでなく、島自体を奪われて、流浪化しているのである。

日本を「唯一の被爆国」と呼ぶ思想は、こうした他の国の人々の被爆の事実を見落としているという点で決定的に誤りである。その上、私は最近つくづくと思う。日本人とは、自分の被害だけはよく見えるが、他人の被害は見えないし、それに自分が加担している時でさえそれが見えないと。

朝鮮人被爆者をいまだに差別しつつづけている私達

よく知られていながら、実際には何等の救済処置も施されていない問題の一つとして、広島・長崎での朝鮮人被爆者の問題がある。被爆当時の広島市の人口は二八万人から二九万人、長崎市のそれは二四万人前後といわれている。しかし、広島・長崎には国民動員計画で徴用されたり、国民徴用令で強制連行されてきた多数の朝鮮人労働者がいて、やはり原爆に被爆しているのである。そして、彼らは被爆後も日本人と差別され、日本人被爆者なら助かったかもしれない生命すらもが、苦しみ悶えながら葬られていったのである。実際に被爆した朝鮮人の数については、広島で二万七〇〇〇人から五万人、長崎では一万二〇〇〇人から二万人という程度にしか分かっていないのであり、この人数すらははっきりしないということ自身が朝鮮人被爆者の生存条件がいかに厳しかったかを示して余りある。

広島市の平和公園の真ん中には原爆被爆者の慰霊碑があり、その慰霊碑には

「安らかに眠って下さい、

過ちは二度とくり返しませぬから」

と刻み込まれている。そんな言葉を信じられるほど日本あるいは日本人が立派だとは、もともと思っていないかった。しか

し、一九八四年に広島を訪れて、私のその思いはまた一つ強くならざるをえなかった。広島には朝鮮人被爆者のための慰霊碑もあるが、実は、その碑は平和公園の中に建てることを許されず、本川を渡った対岸に建てられている。

関東大震災の時に沢山の朝鮮人が、ごく一般の日本人に虐殺されたことは有名だし、原爆が落とされた広島でも朝鮮人被爆者はまともに生き抜く機会さえ与えられなかった。当時が異常事態であったとの理由で、そのことが免罪されるはずもないし、ましてや被爆後四二年たったいまでも平然と朝鮮人を差別し、そのことに何の痛みすらも感じない日本人および日本の社会を、私は恥ずかしく思わないではない。

排外主義から国際連帯へ

チェルノブイリ事故で放出された死の灰は、人為的に引かれた国境などをものともせず世界全体を汚染した。そして、そのことは実はもっと大切なことを示している。つまり、もともと国境というものは、歴史の中で度々塗りかえられてきたように、その時の支配・被支配の力関係で決められてきたものに過ぎず、本質的な意味を持つものではないというのである。そのことを十分に認識していた原子力推進派は、チェルノブイリ事故後、国や社会体制といった相違を超えて連帯し、今後も原子力を強行する姿勢を示している。

一方反原発運動の側も、国を越えた国際的な連帯を模索し始めている。実は一九八六年九月に、反原子力国際会議がウィーンで開かれ、世界の約三〇カ国から、反原発に関わっている人々が集まった。参加者のなかには、核実験の犠牲にされてきたタヒチの人、核燃料再処理工場のため子供達に白血病が多発している英国ウィンズケールの人もいた。また、モスクワ・トラス・グループと呼ばれる人達も参加しており、彼らは、チェルノブイリ事故後、逮捕・拘留という当局の弾圧にも負けずに、モスクワで原子力に反対して活動している。そのグループの一人の女性は集会で発言した。「私は今この場で発言しているが、私はもうモスクワには帰れない。」

私が大切にしたいのは、日本や日本人ではなく、世界中で、困難を乗り越えて原子力に反対し続けている人達である。私の仲間は世界中どこにでもいるし、国境を越えて彼らと連帯したい。そして、いついかなる時でも、たとえ国と国とが戦争するという時でも、決して『国』とか『国民』という誤った觀念に惑わされなくて生きなければならぬと痛切に思う。同じ国民だから仲間なのでもなく、同じ民族だから仲間なのでもない。連帯すべき仲間はまさに国境を越えて世界に広がっている。

国際連帯に至る日本人としての条件

第二次世界戦争における犠牲者の数は、日本人が約二五〇

万人といわれているのに対して、中国では一三〇〇万人を超

えている。⁽¹⁸⁾そしてそのほとんどが非戦闘員であり、その責任

は大部分日本にあったのである。その中国には万人坑と呼ば

れる累々たる骸骨の山がたくさんあるが、そこは日本人によ

って虐殺された人々、一つの場所で一万人にも達するという

人々のヒト捨て場である。ところが、虎石溝の万人坑には、

「不忘階級苦」という垂れ幕がかかり、日本あるいは日本人

を十把一紮で敵視してはならないと教えているのである。⁽¹⁹⁾

戦争中の日本では、「鬼畜米英」であり、国と国、国民と国民

が対立しているという図式しか許されなかった。しかし、そ

うした図式は誤りであるし、その意味では「不忘階級苦」が示す

思想ははるかに本質を捉えている。しかし、やはり私はこだわ

ってしまふ。日本軍の三光(殺しつくし、焼きつくし、奪いつく

す)作戦の残虐さ、南京大虐殺の残酷さはいうまでもないがそ

うした数限りない残虐行為は、私達日本人のごく普通の父祖
達が行なってきたのである。日本あるいは私達一人ひとりの
日本人が、「不忘階級苦」の思想で許されるためには、私達がま
ず排外主義的な思想を棄て去ることが最低限の条件である。

反原発運動の飛躍のために

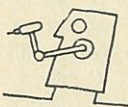
現在の肥大化した資本主義社会は、エネルギー危機をはじ
めとして、まさに大きな危機に直面している。そして、原発
は浪費によって支えられてきたこの社会を、一層の浪費によ
って乗り切ろうというあがきなのである。しかし、浪費が原
因で生じた危機を一層の浪費で乗り越えられるはずもなく、
いづれ破綻はやってくる。その晩にこの忌まわしい社会が崩
壊するとすれば、それは嬉しいことである。しかし、その過
程で、多くの弱者が犠牲にされるであろうことを思えば、や

ロボタイゼーション

□ボットは

工場を変え、
社会を変え、
人間を変える。

◎ロボット化現象——それは単なるオートメ化の延長とは異質なも
のだ。オートメ化は社会的広がりが少なかった。それでも社会生活
や価値観への影響はあった。◎ロボット化ははるかに広く深く、人
間を変えていく。ならばその底流にあるものは何か? ◎町工場、現
場から、産業革命にまでさかのぼって検討する、ロボット化社会論。



森 清 著
定価二〇〇〇円

(株)技術と人間

〒162 新宿区神楽坂3-6-12

☎03-260-9321

はり私達はいま現在の運動のあり方をしっかりと点検してみる必要がどうしてもあると私は思うのである。

これまでの反原発運動は、ともすれば原発がただ恐いということだけを問題としてきたし、今回の輸入食品の放射能汚染もただ恐いということだけが問題にされようとしている。

恐いことはもちろん事実である。しかし、運動がただそれだけに留まってしまうならば、他の多数の運動との連帯が視えないばかりか、それは自分だけの安全を問題とする排外主義的な運動になってしまう。繰り返しになるが、運動が恐いということから始まることを、私は否定していいない。そうして始まった運動でも、決して忘れてはならない原則があるであろうことを述べているのである。一刻一刻の運動が、真に求めている目標に向かっていくかどうか、常に確かめながら運動は進めるべきだと私は思うのである。

前回の論文を書いた私に対して、『運動の破壊者』なる批判を寄せた方もおられたし、『運動には運動で応えるべきだ』との指摘を下さった方もいた。私は、それらの批判を私の課題として受けとめ、甘受したい。しかし、私個人への批判とは別に、私が提起した問題については、どうか運動内部で充分に検討して欲しい。

どういう人達の立場に立つのか

現在はとても難しい時代である。何かの運動をしていれば、それだけでマルとはいかない。いま求められているのは、明確な世界観に裏打ちされた運動であるし、それが当面確立できない場合には、自分自身がどういう立場に身を置いて生きるかを常に自問しながら生きることである。

日本の醜悪な外国人差別に抵抗し、入国管理証を焼き捨てて投獄された在日朝鮮人宋斗会は、書いてある。⁽²⁰⁾

「反戦だの反核だの平和だのいう日本人達よ、まず私の頭を踏んでいるその足をのけてくれ。踏んでいることさえ気がついていないようだが。」

私達は一人ひとり、どういう人達の立場に立ち、どういう世界に向かおうとしているのか。

注

- (1) 小出裕章、「放射能汚染の現実を超えて」、技術と人間、一九八七年一〇月号 四四—五五頁
- (2) デーリー東北、一九八七年十月九日号など。
- (3) 八戸市民生協、佐賀市民生協、大阪いずみ市民生協などのピラから生協連の主張をまとめた。ウルトラプライスについては一九八八年一月現在の大阪いずみ市民生協のものである。
- (4) D. L. Preston & D. A. Pierce, 「原爆被爆者の線量推定方式の改訂による癌死亡リスク推定値への影響」, RERF TRI-86
- (5) New Scientist, 19 November 1987
- (6) 朝日新聞、一九八七年十二月二十三日夕刊
- (7) J. W. Gofman, "Radiation and Human Health", Sierra

Club Books (1981)

- (8) 青山明弘、「汚染食品と原子力時代の生き方」、技術と人間、一九八八年一月号 七三—七五頁
- (9) NHK TV、放射能食糧汚染—チェルノブイリ原発事故二年目の秋—一九八七年十月六日
- (10) 山本知佳子、ベルリンからの通信、一九八七年八月二十日付
- (11) 岩佐嘉寿幸氏訴訟判決、一九八七年十一月二十日
- (12) 毎日TV、放射能食糧汚染、一九八七年十二月十二日
- (13) 発ガンのリスク係数は、前回の論文同様、ゴフマンの示したものであり、368人・レム当り一件のガン死である。
- (14) 米政府特別調査報告「西暦二〇〇〇年の地球」(家の光協会、1980年)表6-5、表6-6より作成。
- (15) 朝日新聞社「The World Today」(1987)に掲載されているデータより作成した。
- (16) この問題および日本人の加害者性については、岩松繁俊、「反核と戦争責任」、三二書房(1982)が詳しく論考している。

(17) 広島市長崎市原爆災害誌編集委員会、「広島長崎の原爆災害」、岩波書店(1979)

(18) 戦争犠牲者を心に刻む会編、アジアの声、東方出版(1987)

(19) 本多勝一、中国の旅、朝日文庫(1981)

(20) 「草の根通信」(草の根の会発行) 第一六一号に掲載された青柳敦子さんの文章から引用した。

(前稿同様、本稿も京都大学原子炉実験所原子力安全研究グループの皆さんの助言の上に書いたものですが、一切の責任は小出個人にあります。)

(こいで ひろあき、京都大学 原子炉実験所)

生命に挑む

利根川

進・花房秀三郎の世界

渡辺 格 監修
利根川 進
花房秀三郎

四六判 200ページ 定価1200円(≒300円)

利根川博士ノーベル賞受賞記念緊急出版、分子免疫学、ガンの分子生物学研究で世界をリードする両氏の最近の研究と海外で活躍する頭脳としてのプロフィールを紹介。

日刊工業新聞社

〒102 東京都千代田区九段北
1-8-10 ☎03(263)2311(代)